

## 平成27年度長崎大学がんプロ養成基盤推進プラン在宅・地域医療実習

実習生：田渕 聡

実習先：ホーム・ホスピス中尾クリニック

実習期間：平成27年7月6日（月）～8月21日（金）

実習生感想：

私は今回の実習で、長与にあるホーム・ホスピス中尾クリニックにてお世話になりました。中尾クリニックの中尾 勘一郎 院長は講演会などの案内でお名前を拝見したことがあるくらいで、実際にお会いしたのは初めてでした。私は女の都に住んでいるためクリニックの近くまでは来たことがあったのですが、最初にクリニックに着いた時の印象はきれいな庭に水をやっている職員の方がいて、また、近くからは学校に通う学生の声がこだまする何とものどかな空間が広がっていました。いわゆる治療だけのクリニックではなく、訪れる患者さんが心地よく過ごせる空間がそこにあるように思いました。

私は、約1か月半に渡り、お世話になったわけですが、こちらの外勤などの日程にも対応していただき、大変ご迷惑をおかけしたとは思いますが、非常に柔軟な対応を院長先生はじめ、スタッフの方々にもしていただきました。

診察は午前中、午後ともに通院できる方は外来受診をされ、診察が終了すると、院長先生が運転される軽自動車に看護師の黒田さんと三人乗り込み往診に出かけます。まず、驚かされたのは、院長のドライビングテクニックと裏道を駆使した無駄のない往診プランでした。また、看護師さんのかばんも持たせていただきましたがかなり重く驚きました（しかし、その中身は往診先でもある程度の要望に応えられるだけの物品がそろっていました）

### 【多岐にわたる疾患の管理】

多くの癌患者さんはもちろんのこと、巻き爪、坐骨神経痛、脊髄小脳変性症、肺炎、膀胱腫瘍、認知症など多くの疾患に対応が必要なのことがわかりました。もちろん専門的な治療は重要ですが、日常の管理、変化を見落とさずに基幹病院と連携しての医療の重要性を再認識しました。

### 【疼痛管理、精神的安定に関する豊富な知識と新たな治療を学ぶ姿勢】

また、中尾先生は疼痛管理に対して自信をもって取り組まれている様に見えました。「痛くないようにしてあげるけんね」。癌患者さんはもちろんのことですが、その他の患者さんも頭では理解できていても、やはり痛みというものは恐怖心を引き起こします。そこで疼痛管理をしっかり、丁寧に行ってあげることによって患者さんは最後まで、その患者さんらしく時間を過ごせていました。また、新しい薬も積極的に使い、患者さんの苦痛

緩和に尽力されていました。

#### 【Oncological emergency】

この短い期間の中でも数回患者さんの急変に遭遇しました。恥ずかしながら緩和医療を在宅でされている患者さんが、再度積極的な治療を要するという流れがどこか欠落していました。緩和医療を行っている患者さんはなんとなくこれ以上、積極的な加療しないものだと思っていましたが、中尾先生は癌の進行に伴うものか否かの判断をしっかりと行い、迅速に対応されていました。急変し、緊急の治療を必要となったときの受け入れ、地域中核病院との連携、理解のあり方が非常に重要であり、私たち基幹病院で働いている職員もその認識を新たにすると感じました。

#### 【在宅訪問を行うことによって見えてくる社会・家族の一員としての患者さんの存在】

玄関を開けたその瞬間から、普段通院している患者さんからは見えない様々な情報が目に飛び込んできました。生活感、こんなところに住んでいるのか、ここから通院するのは大変だろうな、きちんと整頓され、自分の生活しやすいように工夫されている、母親として、妻として、夫として病気と向かい合いながらも家族としての立場を全うされている姿。そういうことをお互いに共有しながらお互いに考えながら、治療を行っていく。こうして、深い関係性、信頼関係が構築され、最終的に在宅での看取りに関してもゆっくりと時間をかけて相談できる状況になることがわかりました。

ここに書いたこと以外のことも多く経験でき、また、社会的な資源の活用の仕方もさらに学ぶ必要があると実感させられました。

今後の自分の医師人生においても貴重な経験ができたと思います。最後になりますが、再度、中尾先生、中尾クリニックのスタッフの方々、また、この様な機会を与えてくださったがんプロ養成基盤推進プランの関係者の方々に感謝いたします。





長崎大学 腫瘍外科 田渕



【実習報告会にて】